明代滿蒙史料　全三三册

李朝實錄抄　第一册～第十四册、總索引、計一五册。　東京大學文學部
明實錄抄　蒙古篇　一～十（附、西藏史料）、項目總索引、計一一册。　京都大學文學部
〃　滿洲篇　一～六、項目總索引、計七册。　京都大學文學部

明代滿蒙史料と題されたこの大部な史料集が、東京・京都の兩大學東洋史研究室から刊行され始めたのは、昭和二九年に遡る。その後、毎年、着々と出版され、今年三月ついに全三三册の刊行が完成した。各册をみると、李朝實錄抄はだいたい五〇〇頁前後、明實錄抄は七〇〇頁前後のものである。いずれも、凡例（例言）・目次を掲げ、さらに、蒙古篇一・滿洲篇一には羽田亨博士の「皇明實錄抄序」五頁、田村實造教授の筆になる「あとがき」五頁、李朝實錄抄第一册にも、旗田・三上・山本三教授の名による「序」八頁が附載されている。

内容は、表題どおりに、一四世紀後半から一七世紀初めまで、中國の明代に相當する時期の滿蒙方面の基本的史料として、明實錄と李朝實錄とから關係記事を抄錄したもので、明實錄抄においては、蒙古篇に収めるところ、洪武元年（一三六八）一二月丁卯朔、明の大將軍徐達が元の勇將擴廓帖木兒を太原に破る記事に始り、滿洲篇では、洪武二年四月乙亥、遼東における元の勢力を代表する納哈出のことから、また蒙古篇十と合卷の西藏史料篇（本文四五二頁）も、明廷がはじめて吐蕃に使節を派遣する、洪武二年五月甲午朔の條から、明一代の關係史料をあつめて、いずれも、明末天啓七年（一六二七）まで及ぶ。同じく、李朝實錄抄は、太祖實錄卷一高麗朝の記事から仁祖二二年（一六四四）までを含んでいる（明實錄抄の各卷目次は本誌前號一八卷二號八四頁に掲載されてある）。

この史料集が、このような形で、今日完成されるまでには、東京・京都兩大學の東洋史研究室、幾代かにわたる變遷があったことはかなりよく知られていることであろう。しかし、今、直接ことに當られた諸氏の功をたたえる意味からも、この史料集の持つ意義を考える點からも、その經過をここでかえりみることは必要だと思う。ただ、丁度、田村教授が本誌前號（七九～八四頁）に「『明代滿蒙史料』の刊行をおえて」の一文を寄せられ、とくに明實錄抄については、當事者として正確な記述をされているから、重複をさけて京都大學關係のことは省略し、東京での李朝實錄抄錄についてだけふれておこう。いずれも序言などにも明記されているところだが、だいたい次のような概要だった。すなわち、明實錄抄と同じく、遡って昭和八年、當時の外務省文化事業部における滿蒙文化研究の一事業として、並行した企劃として李朝實錄よりの抄錄が東京大學で着手された。池内宏博士指導の下に旗田巍氏が擔當されたもので、五年を經て稿本は完成、昭和一七年、日滿文化協會による出版刊行が企劃されると、あらたに深谷敏鐵氏が加って增補され、その新稿本により、明實錄抄蒙古篇一と同じく李朝實錄抄第一册だけは出版された。しかし、既に印刷にかかっていたといわれる第二册目以下は、

大戰の動亂のなかに陽の目を見なかつたのである。

そうして、戰後、再び出版の企劃がおこり、緒につく直前池内博士は死去されたが、李朝實錄はやはり東京大學において旗田巍・三上次男・山本達郎三教授の責任で、京都大學における田村實造・三田村泰助兩教授の監修による明實錄抄と並んで進行しはじめたのが昭和二八年のことだつた。今回は、李朝實錄抄では、明實錄抄が行つたような、その稿本について新しく手を加えることはなかつたようであり、稿本の整理・印刷のことなど、一・二卷を前回どおり、旗田・深谷兩氏が、三卷以降については、山根幸夫氏がほとんど全卷にわたり、ほかに、松村潤・宇都木章・後藤均平の三氏が部分的に山根氏に共同して實務に當つた。このとき、明實錄抄の方は、田村・三田村兩教授指導の下に、三たび增訂が加えられたわけで、その事情は前掲田村教授の一文に詳しい。それにしても、企劃の當初、內藤・羽田兩博士指導下に三田村氏と今西春秋氏とが完成された初稿、次いで三田村氏と長谷川一郎氏、さらに內田吟風・岡崎精郎兩氏などにより補訂が重ねられ、この三稿に當つては、前記兩教授の下に、萩原淳平・間野潛龍兩氏をはじめ、山崎武治・河內良弘・岩見宏・井ノ崎隆興などこの方面の專攻者諸氏が集り、ほかに藤原利一郎・藤本勝次・笹本重巳・米田賢次郎の諸氏も實務を分擔し、東洋文庫の田川孝三氏の贊助も得て進められた新稿本の作製刊行、いわば三代にわたつて明實錄抄錄刊行事業に直接參加された人たちの名は、やはりここにあげておきたい。なお、新しい企劃として、佐藤長氏の手になる稿本に、岩見・山崎兩氏の協力による增訂を經た西藏史料がつけ加えられたことも忘れられない。

このような經過をみただけでも、本史料集の編纂刊行が、屈指の大事業であつたこと、おのずから明かであろう。思うに、大戰を間にはさんだにしろ、前後四半世紀にわたる年月をかけ、出版の困難をのりこえ、稿本の改修をくりかえし、指導監修者また實務擔當者が代を替えながらも、當事者は完成ののぞみを捨てず、學界もその刊行を注目して待つていたという事實のなかにこそ、この史料集の持つ意義は遺憾なく語られている。その意義、學界の期待というのは、一つには、わが東洋史學における滿蒙史研究の傳統のなかからうまれる。現在でこそ、必ずしも中國史研究にふれないで、中國以外の諸地域・民族史を專攻することも行われ始め、〈東洋史學の分裂〉とでも、いうべき狀況になつてきたが、これまでのわが東洋史學は、あくまでも中國史研究とは切り離せなかつた。しかしその間にあつても、滿洲から東蒙・內蒙方面の地域・民族に關する研究は滿蒙史として早くから開拓され、それらの地域に對するわが國の權益確保の下に、世界的にも最も注目される研究成果を持つている。「滿洲歷史地理」「滿鮮地理歷史研究報告」などに示されるような歷史地理的研究は、大正期を特色ずけるものだつたし、昭和に入つてから年を逐つて活潑化した東亞考古學會その他による遺跡調査、滿鐵調査部・善隣協會關係その他による實態・舊慣調査・資料蒐集など、そのどれ一つをとつても比類のない業績に數えられよう。

しかし、これらの成果を通じて、時代的には、古代はともかく、遼金元三代、次いで清朝以降に關する研究もしくは史料蒐集に比し、明代に相當するあたりは、わずかに和田清博士の一連の研究以外、きわめて手薄だつたことは否定できない。その不振の大きな一因は史料の問題だつた。そもそも、明實錄が、一四世紀半ばから一七世紀にかけての東アジアに關し、貴重な史料を提供するものであるこ

と、又、李朝實錄が同じく、一四世紀後半以降最近までの、極東における屈指の歷史資料であること、いずれも衆知の通りであり、民族固有の文獻史料に乏しい滿蒙地域の歷史についても、多くの史料を提供するものであること、これ又、いうまでもない。しかし、確かにこの大部な史料、ことに明實錄のように各種鈔本が存在するものについて、個人的にそれを用い研究を進めることは必ずしも容易ではなかったのである。そこに、このように多くの專攻者が、多年の勞苦を傾けて完成したこの史料集が世間に問われたのであるから、まさに學界の現段階において緊急に求められていたものが與えられたということになる。

さらに、日本の東洋史學發達の上にこのような意義を持つということと並び、ひろく、世界の學界への寄與となることも指摘される。明實錄の鈔本は、確かにアメリカ・イギリスにはあり、もちろん中國にもある。しかし、少くとも現存のものはいずれも錯簡・脫落・誤字・脫字が少くなく、一本のみに賴ることは許されない。このような事情のとき、これだけ有能なスタッフによる校訂を經た抄錄を行い得るのは、それこそ傳統を持つわが國ならばこそと云っても過言ではなかろう。佐藤氏稿本による西藏史料篇なども、たしかにチベット文獻による研究は歐米で非常に進んでいただろうが、これだけ質量ともにすぐれたものは十分用いられていなかったはずで、非常に期待されているものであると聞いている。李朝實錄についても、ごく最近、大韓民國政府及びわが學習院大學東洋文化研究所において縮册影印により刊行され始めたが、いずれも完結していない。もちろん從來滿蒙史研究史料として海外で利用されたことはなかったものである。

このように、內外の學界に寄與することをこれほど期待されるだけの意義を、本史料集は持つものであるが、こうしてみると、改めて思い起こされるのは、そもそもの發案者、當初の指導者、內藤・池內・羽田三博士のことである。今はいずれもこの完成を見られることなく故人となられたが、とくに內藤博士のごとき、常に新史料の開拓に努力され滿蒙關係でも、蒙文元朝秘史、元典章、蒙古源流、滿文老檔などの將來、あるいは滿蒙叢書の刊行など、すべて博士の盡力だった。羽田博士も劣らず、また內藤博士に多く協力されたものだし、池內博士も、そもそも、李朝實錄より滿洲關係記事の抄錄を、この企劃以前に御自身の仕事として進めておられたという。先覺者の先見だったのである。

私は本誌書評欄への執筆のつもりでいながら、いささか用いうべき意義ばかり述べすぎたかもしれぬ。しかし、今、この三三册という大部な史料集について個々の批判すべき點を指摘することなど、現在の私には到底できない。それでなくとも、某氏の言であるが、「過なくてあたりまえ、すこしでもあれば槍玉にあげられる」というたぐいのこのような仕事、もし、何らかの瑕瑾ありとしても、それは、今後この史料集を十分利用するものにこそ發言の權利はあろう。ただ、それにしても、このような史料集の編纂について、抄錄すべき記事の範圍をきめること、原本における語句・文字あるいは文章などの脫誤の認定、とくに明實錄のばあい諸鈔本の校合、底本の決定などの問題に當面したはずであり、これらの點についてどのような操作が行われたか、そして問題のあるばあい、編者の見解はどの程度打ち出されどのように示されているか、などについては當然ながら關心を持った。そして、それらの諸點については、多く原

則として凡例（例言）に明示されているところであり、李朝實錄のばあい、「明代の滿洲蒙古に關する同實錄の記事は廣きに從つて細大漏らさず」、「凡そ明代の滿洲及び其の周邊に於ける滿洲民族の活動事蹟・社會習俗等を傳える記事は、これを網羅し、交うるに李朝と明朝の女眞民族に對する政治・軍事・經濟上の施策と施設とを傳える記事、並に遼東と朝鮮との交渉に關する事項を以て」するということだし、明實錄のばあいも、蒙古篇においては「漠北の地に退いた後の蒙古民族の動靜を傳える一切の記述、その社會・習俗及び明朝の蒙古民族に對する政治・經濟・軍事上の諸施設並びに對蒙古政策に關するもののうち重要と思われる事項を收め」、滿洲篇においては「取材の範圍を明代滿洲の地域に限り、この地域內に據つて活動した諸民族の事蹟に關する一切の史料を收めた。ただし日本民族に關する若干の記事は省略した」というのが、まずその抄錄範圍に關する解答で、かなり廣くとり下手に限定することは極力さける方針がとられている。より詳しく具体的な面は、やはり田村教授が實際に苦心されたところを記しておられ（本誌前號八一・八二頁）、知ることができるが、このような方針が勞をいとわずとられたことに、全幅的賛意を表したい。又、同じ態度は、たとえば、明實錄で、史上注目すべき兀良哈三衛に關する記事など、原則上蒙古篇に入れながら、記事によつては滿洲篇にも收めて重出をいとわず、むしろ脫落をさけた丁寧さにもみられる。但し蛇足ながら、一言すると丁寧さといつてももちろん限度があり、たとえば、西藏史料篇の例言に明記されているところだが、嘉靖以後の青海西藏に關する記述のように、その殆んどが西藏人のみならず蒙古人にも關連しているため、蒙古篇に收められたものは西藏篇では敢て重複を避けてあるし、特に西北トルコ系種族などとの關連事項については、重要なものはもちろん採錄されているが、細事については取捨あり、テーマによつては、利用に當つて注意せねばならぬようである。（具體的一例は、明實錄抄蒙古篇一に對する佐口透氏の書評にもある。ユーラシア學會研究報告「遊牧民族の社會と文化」二一六頁）

本文校訂についても、極力原本を尊重しかりそめにも獨斷に陷ることをさけようとする方針が貫かれている。李朝實錄のばあい、底本はいわゆる景印太白山史庫本で、校合すべき異本もないから簡單といえば簡單だが、原本の體を極力保存するよう配慮され、たとえば、文字の誤脫などの明かなものも、一應原字を保つて傍に（ヽヽカ）と記した校訂を試み、疑問を存するものには（マヽ）を附している。（李朝實錄については、丸龜金作「朝鮮の春秋館と李朝實錄の撰修とに就いて」史學雜誌五四の一〇・一一、末松保和「李朝實錄考略」學習院大學文學部研究年報第五輯を參照）一方、わが國にも諸種の鈔本がある明實錄については、それらの校合に最も意が用いられねばならなかつたに相違ない。これ又、田村教授が詳しくまとめて記述されている（本誌前號八二・八三頁）ので詳細は略すが、とにかく、底本には京都大學本（內閣文庫本に收藏されている二種の古鈔本を綴り合わせて謄寫し、とくに、萬曆、神宗朝以下については、曾て和田淸博士が鈔寫させられた舊北京京師圖書館本で補つてある）をあて、宮內廳圖書館本・上野圖書館本、さらに梁氏本・東洋文庫本などを對校に用い、神宗朝については、實錄とは別種の記錄と思われる內閣文庫本の記事も史料的價値あるものは採錄してある。又、その間に、現在米國議會圖書館に收藏されている舊北京京師圖書館本がマイクロフィルムで入手され、特に世宗穆宗朝の改

訂に用いられたことは、國際的學術交流の具現として特記しておきたい。附言すれば、この米國にあるものは、どういうわけか神宗朝以後は缺けており、前述和田博士の鈔本と、丁度相補う恰好になる由である（明實錄各本については三田村泰助「明實錄の傳本に就いて」東洋史研究八の一、淺野忠允「明實錄雜考―影印本を中心として―」北亞細亞學報三、特に米國議會圖書館本については間野潛龍「皇明實錄私考」神田博士還曆記念書誌學論集を參照）。そして、これら異本の校合により、底本の文字につき訂すべきものは訂したが（煩を避けて校勘記は附されていない）、明かに誤字脫字と思われる箇處も諸本共通のものは舊のままに止めてあり、又、底本に全く記載を缺き別本にのみあるものについては、出典を明示して一括して掲げてある。いずれにしろ、特にこの明實錄については、戰後の第三次改稿に當り、田村・三田村兩教授の指導の下で、採錄範圍も對明關係特に經濟事象などを大いに增し（田村教授前掲稿參照）、初稿の完成に要したと同じ五年間を、採錄記事の決定、諸本の校合に若手のスタッフが眞劍な討議を重ねていたことは、私など折々實見したところである。事實、人名・地名とか決しかねることも少くなかったはずで、十分考證を經てもなお二對二で斷定しかねるばあいが例言にいう「疑わしく取捨に迷った文字は一應當該文字の右傍に一段小さく並記しておいた」ものであると了解される。數字なども史料として問題になる個處少くないだろうが、ルーペを持ち出したり總計あれば逆算をこころみたりの勞作を加えたものだと聞く。

索引は、李朝實錄抄は人名・地名（附、部族・民族・國名）の總索引であり、明實錄抄の方は、史料本文を要約して項目見出とした年表形式（西暦年數も附す）のものである。正直なところ、どちらのシステムもそれぞれ便利なもので、特に、あまり試みられないようだが、このような內容そして大部のもののばあい、後者の樣式は豫想外に便利のようである。

ともかく、本史料集の價値は、それを瞥見するだけで見出されるようなものではなく、十分に活用驅使されてこそ、その眞價は發揮されるものであろう。又、十分それにこたえるものであることを私は疑わない。そして、今後に發達を期待される明代の滿蒙研究に、國の內外で大いに寄與するに相違ない。事實、事に當られた新進研究者のうちから、當該分野について將來指導的立場に立たれるであろう專攻者がうまれてきている觀もある。間野氏の前掲論文や萩原淳平氏の「アルタン・カーンと板升」（東洋史研究一四の三）、「小王子に關する一考察」（東洋史研究一七の四）、「明代中期における北方防衛と銀について」（東方學一六）、山崎武治氏の「一條鞭法の創行について」（立命館文學一五二號）、河內良弘氏の「李朝初期の女眞人侍衛」（朝鮮學報一四）、あるいは田村教授の近作「明代の九邊鎭」（石濱先生古稀記念東洋學論集）など、今、私の思いつくものだけ、なかでも若手研究者の勞作は、すべて專業を拋って五年間この史料集の完成に從事されている間の所產だったと思う、もちろん、この史料を十分に驅使したものである。なお、その他の諸氏の關連研究も近く一本にまとめられると聞いている。

以上、とり急いでの執筆で、讀者諸賢には至らぬ紹介評言に終ったことをお詫びする。最後に、故人となられた三博士以下關係諸氏に對し、重ねてその勞を謝し讚えると共に、出版については、文部省當局の配慮と、內外印刷所の擔當の方にも敬意を表したい。

（一九五九年一〇月稿）　（山田信夫）